

表紙

6039

道話記聞 三十一

6040

道話記聞卷三十一

蔵印

一中澤先生御遺書

同対策

6041

参前舎 丸朱印

享和三亥歳五月六日はくろ町高嶋屋嘉五右衛門殿  
予と忒人を中沢先生居間江招給ひて仰遣るハ  
当八月ハ京都江罷上るに付愚意之趣代筆  
にて書残し置んと思ふ此書付を見て下されと  
見せ給ふによりて兩人つくくゝと拝誦し申  
けるハ随分是はよろしく候半なれとも御自  
筆にてなくは諸人うけかい申まし末の方

6042

へ御自筆の添書なされ予らに御渡しなさるへし  
といひければ先生尤とのたまひ則末江自筆  
を加へ渡し給ふ其月下旬より病氣付給ひ ゑり  
に腫物出来大ニ痛む由申さるゝに付当地二名  
人と呼ばれたる外科杉田玄伯左二見せけるに こ  
れハ対喉瘡といふ腫物にてむつかしきよし  
療治も出来兼る由 皆々大ニ驚き早速御官医  
桂川甫庵様を相頼ミ又内治ハ医学館のぬし

..

多喜安長様御療治ありけれども老病之事  
天運の究る所か次第くにおとり給ひ六月  
十一日死去し給ふ 七十九才也皆々幼き子供  
母を失ひたる如く悲しめとも甲斐なけれハ武  
蔵国葛飾郡猿江なる妙寿精舎に葬りて  
一墓の主とハなり玉ひぬ

6043

野辺送り六月廿日葬送の人数一千余人

法事ハ寺にてもいたし候へとも又々参前舎へ  
集る人三百余人非時沍汁五菜引物餅菓子

御病氣より法事迄の入用金七拾四両貳分此  
内妙壽寺へ納金廿九両壹分也 但し祠堂金とも  
諸々より至來の香奠金七拾七両也 差引のこり  
金貳両貳分中沢妙意様へ遣す

此外金五百■人足寄場御奉行様より被下候

..

是ハ御 上より頂戴之香奠なれハ後證のため  
其儘京都明倫舎へ相登す 書付の名目失念  
御遺書のうつし

末ニ享和三年八月とあり

是ハ八月上京の思召故月日相違

五月六日ニ予ら江御渡し也

#### 頼置候口上書

私事御存之通近年は別て及老衰何事ニ  
不限失念勝殊ニ入組候用談等之事前後  
不極之事共多々御座候ニ付参前舎之義

6044

此度より各様方江御頼置勿論当時之事ニ  
不限此末共ニ万事為御任御頼申度候間万端  
御踏込被成候て御一同御相談之上御取計可被下候  
右御頼申上候上は於私義一存之存寄を以取  
計ヒ不仕御一同御相談之上取計ヒ可申候存寄ニ  
御座候各様方ニも御一存之御取計ヒ不被成御一同ニ  
御相談之上万事御取計可被下候此段御頼申  
置度荒増之条左之通御座候尤京都より参居候

御舎中一統申合候定書有之候得は猶又参前  
舎之義は是迄致来候格式も有之候故為念  
私存寄を御頼置度左ニ認候

一遠国近国共ニ新舎取立等之義申立候節は  
是迄致来候通能々相糺之上明倫舎江願之  
添状都講中より差出シ舎号相下引渡等之義も是  
迄仕来之通急度法例不乱候様ニ御頼申候事

一京都并諸国交通等之節も御一同ニ御申合何事ニ

6045

不限御相談之上御掛合可被下候事

一前講御兌之節は都講中御一同ニ御聞性理心 \*？

得之程等御糺之上御評議被成候て其上ニて御兌  
可被成候則印鑑等は前々仕来之通御渡可被下候尤  
本講之義は勿論之事ニて御座候事

一善導印鑑御渡被成候已前ニ一通り為致候て始終一  
同ニ御聞被成候て不行届所有之候ハ、其段御示被成  
候て御一同ニ御同心ニ候節善導札御渡シ可被成候

..

未熟ニ候ハ、幾度も下地を致覺させ候上ニて御頼可  
被成候先入を主とする修行第一之事ニ御座候間  
御勘弁可有之候事

一都講加入被成候節御一統御評議之上御頼可被成候事  
一補仁方御頼候義舎中一統申合定書相渡候て

其旨為心得御頼可被成候事

一講師他国江出候節印鑑相渡頼之添書是迄之  
通御渡可被成候兼て前講致候御方々江印鑑無之

6046

他国江出候て道話等致候事不相成候段可申聞置候  
都講衆中江無届印鑑も所持無之参候ハ、前  
講印鑑取上急度以来之所御断り可被成候説口  
先々江も不埒之儀可申聞候

一不限何事ニ修行躰之事ニ付諍節相発候節  
相對之諍ニ不及都講中江出候て其評能々可  
請候事

一舎中方心得違有之候節は都講中より申聞候  
歟又は口入之方江申合相改候様可致候委細之事  
は申合定書ニ有之候間兼て之義は一統ニ相心得  
候様ニ御副書渡之跡ニて社中申合定書為読聞  
若相背不用候事於有之は御断書副書共  
取上可為破門候事

是より先生御自筆也

御断り申上候右十ヶ条之義自分ニ認度候

6047

得共御存之愚老無拠代筆相頼認メ

置候間呉々も御一統に御心得被下様御頼  
申上候

享和三亥年八月 中澤道二

書判

参前舎

武家

御都講中様

町方

..

圭明舎

武家

御都講中様

町方

慎行舎

武家

御都講中様

町方

盍簪舎

武家

御都講中様

町方

6048

月日の関の戸早く明てことし文化六年巳とし  
七とせの年日になりぬれは舎中打より法筵を  
いとなミありし世に仰られたること共語り出し  
侍りて追福をなしぬ

道二翁の七回忌の筵にて

あふきく書侍る かいつけ 了阿

久方のあめにたぐへていや高く

世にあふかるゝ 風やすずしき \*?

..

中澤のうしの七回忌に 明義

久保三左衛門

ありし世の立なりなから 蓮葉の  
うらさひしくも 見ゆるけふかな

中澤先生の教誨に雀わちうく  
からすハかあく人ハ孝行と誠に  
しかなり 人もわれもあへなんもの  
をわすれ草の露はかりも心に

6049

おかて いとなみのいとある折  
ふし 軒ちかくすゝめからすの  
啼を聞てそれかれの事思ひ  
出るまゝよミ侍る

- 5 -

忠孝の道にすゝめ堂<sup>と</sup>耳ちかく  
こえをからすも人のためかあ

田原 船積 由右衛門

中澤先生の七回忌にたはれ哥をよめる をなく 由右衛門  
七とせにはやなりひらとあちここに  
きのふけふとハおもひけるかな

..

中澤先生のおきな<sup>の</sup>七とせの

祭祀によめる 栄女 大和田おゑい

蓮葉のにこりにしまて なき人の  
つゆのめくみそ 世に残りける

中澤翁の七回忌に参前舎の

御送り 魚積

はちすを見てよめる

平兵衛

なき人のあかす愛にし蓮葉農<sub>の</sub>

広き名こそは代々に残らめ

6050

おなしく

きせ 同妻

曇りなき月にたくへて有し世を

おもひ出ぬ累<sub>る</sub> ミしか夜の空

おなしく

栄女

いや高き教へハ代々に 残る羅<sub>ら</sub>舞<sub>む</sub>

曇らぬ月の影もすゝしく

..

中澤大人の七回忌にある人の

あめにたくへてと よめるを聞て

また君子の徳は風のことしと

いへる事を思ひ出て

明義

今はなを に保<sub>ほ</sub>へる風の冷しさに

なひかぬくさハ あらしと思ふ

6051

中澤先生対策

或人先生に問ふて日<sub>いわく</sub> 三界無安唯如火宅と申

て此世は皆火宅の住居と承り候如何致候ハ、

此火宅を逃れられ候哉

社中の答へに

よしあしの思ふ心をふり捨て

只何となくすめは住よし

6052

中澤先生の日

なるほど其歌の通りに違いはないか其唯何と

なくすむといふ事かどうも出来にくひかたひ事

しや／＼ 右哥にも

浪の音きかしかための 山住居

苦は色かはるまつ風のおと

といふてこちらの火宅を一色片付れハ又あちら

から起つて来る手まへになけれハ親類うち

..

から持ツて来て苦しめる とても此からの有ル

内は此火宅を逃ルゝ事ハならぬ／＼によつて

なる程此世は火宅しゃといふ事を真実に覚悟

をすれは少しハ火宅を逃れらりようとまあ

わしハ思ふ

又問

前にいふ火宅を真実に覚悟を致するハ

いかゝして得られ候哉

6053

先生御答

此真実に覚悟するといふ事中々私案分別

を以て及ふへからす此道に入て本心の一端を

しり旧染の悪事ハ改るといへとも長養なき  
人はやゝもすれは火宅にさへられて本分  
之我なしに至る事あたハす よつて時々刻々  
年月を重ねて見得したる本心を養  
ふへし養ひ熟する時我なしの本体ハ安

..

樂を求めずして安樂に至るへし  
其時身に安宅を真実に覚悟する事を  
中庸に君子は其位に索して行ふ其外  
を願はず富貴に索てハ富貴をおこない  
貧賤に索しては貧賤を行ひ夷狄に索  
してハいてきをおこない患難に索してハ  
くはんだんを行ふ君子ハ入として自得せさ  
ることなしと

6054

我役はいやな役しゃと思へとも

天の作しゃの差図ニ是非なし

或人とふて日 きのふ芝居見物に参り  
まして一日芝居の狂言はかりに成ツて  
おりましたハお影にて我なしに  
成ておりましたと存ますと言し時

..

中澤先生日

夫は心か宿かへをしたのじやと仰られた



其意いかん

又御答

君子ハ此方へうつる小人ハ先へとらるゝ  
芝居を我物にして見るへしうつるも  
とらるゝも皆心の沙汰也

近思録に加るか故に君子の学ハ廓然  
たる大公物来ツて順応するにしくハなし

6055

芝居より我たましいのふんしつを

せんきし給へ参前舎にて

或人間今日此方へ参りかけに両国橋を

通りましたれハちいさき紙に仏の像を

画きてあまた流して居りました

何れも利益のある事でござりますか

..

中澤先生曰

夫も何か仏道にて利益ある事で有うぞ

又問

私のしる人も夫を信心して致しまし

たか利益もなく疾ひも直りませなん

だ 左すれハ多くの紙費へにてミな

売僧まいそうの致す事で有うと存ます

先生答へて

6056

其人は夫てよしおまへは利益もなし心に

叶はぬと思ハ、お前はよさんせ

先妻ある方へ娘を後妻に遣しける時申  
けるハそなた先へ行て如何心得候哉と問  
ければ娘のいはく先の子供を実子の  
如くずいふんかわゆかり候半といひけれハ  
或老人の日夫ハ大キなる心得違ひ成へし

..

といはれて則娘に示されける事 **い** **かん**

答

老人の日夫か心得違也何程此方にて愛す  
へきと思ひても親の心子しらすにていとけ  
なき者は兎角無理我儘はかりいふて此方  
の思ふ様にハ思はぬもの也其時そなたの心  
の中にわしか是ほと寵愛すれとも夫を其  
やうに思はぬ事しやと思ふ一念より其

6057

子に憎ミか付て夫より追々不和合に成り行  
もの也 夫はいかにといふにわしか是程愛する  
にと思ふ心の費へ也 されは愛すへきと思はん  
よりハまだおさなき者ゆへたとひ如何様の無  
理をいふとも何やらの事かあらんとも我真実  
の子の如く思ひて憎むまし／＼と心にとめて  
養育せられ候ハ、末永く相続致すへし

とそ **は** **な** されけり

右は中澤先生の御物語りにて又舎中へ御

しめし有けるハ

愛すへしと思ふハ末也 憎むましと思ふハ本也

されは初学の者は善事をなさんと思はん

より先惡事をは せましき事そと思ひ

とりて修行致され候かよろしく候 善事を

なさんと思ふハ末也惡事をなすましと思

ふハ本也 何事にも本末あり

6058

大学に物本末あり事終始あり

論語に有子ノ曰君子ハ本を務む

本立て道なるとあり

或人間 日中に神仏へ灯明を上候事いかん

中澤先生答て曰

昼ハ明りに用ハない心のまことを照すのじゃ

じゃによつておとうめう計てない銘々心の

■をてらしやツしやれや

或僧ノ

問 世に加持祈禱の類多く有事也

此大意いかん

先生答

易に日坤道ハ夫順なるかな天に請て時々

行ふ いふ心ハ天萬物の氣を降す地是を受

て能行ふて萬物なる加ハ陽也持ハ陰

なり則體用なり

加持の文字ハくハへたもつとよむ祈禱ハいのり  
いのるの義也

先生示して曰

たとへハ御高札ハ加にして上より教へを下

し玉ふ民ハ持にして是を能たもち

守りて行ふ時ハ万事成就す陰陽

合体せされハ萬事成就せず

或人間 魂ハ冥途に歸すれとも魂ハ此世 \*皈 俗字

に留りて歸らす杯といふハいかん

中澤先生答て曰

器物の落て割る時其音にひっくりする

是魂にして天に歸す其品を見て惜ミ

思ひを残す是魂にして地に止るなり

たとへハぼた餅を喰ひうまきと思ふハ魂

にして天に歸し餅ハ腹中ニ入て地に止るか如し

或人の許にて先生飯を食給ふに平

の内のせり松たけ様の物を残してあり

けるを傍の舎中見て夫て御下ケなさ

るゝとすたりませう是へ下さりまし

私かたへましゃうといひけれハ

先生答て

是ハ生ゆでからしてこわい よしになされ

すてるハ勿体ないか是と我身と量にかけて

見やしゃりませ

孟子のいはゆる□道ならんか

或人間

好事門を出す悪事千里を走るとハ如何

先生答へて曰

清水の中へ油を一雫入れた様なもの也

油か水の中にて目立なり

6061

人ハ天に住んて善事をなすハ水の中へ水を

入る様なものしやに依て門を出す人もしら

ぬ也 すましき悪をなす故直に千里をはし

るなり 水へ油を少し入たるの如し 参前舎印

了 令和七年六月